

『山中人饒舌』随聞

藤江正通

一般に芸術論と名づける論篇には、芸術を論ずることと並んで、人生そのものに思いを寄せる趣きのある文章が多いようである。

私の机上枕頭の書の一つであるアランの『芸術論集』（桑原武夫訳）は、まさにその最たるものの一つであって、この書物からは、はかり知れぬ人生訓を、今日にいたるまで、尚渉猟しつつづけている。

豊後大分の人、田能村竹田（一七七七——一八三五）の名は、私の美術史学専攻学生のところ、碩学松下隆章、菅沼貞三両先生の講義演習指導の中にあつて、他の文人画家中に、とびぬけて屹立した興味をいだくに値した詩人画家、そして詩人哲学者の名前であつた。そして後年、竹田の最高傑作の例、“船窓小戯帖”および“亦復一楽帖”の実物にふれる機会をしばしばもったとき、私は、かの大雅・蕪村の“十便十宜図”の場合と同じように、私の生涯の中で、これらの至宝類から、必らずや我が人生への最高の、また最良の指針を、刻苦して、我ものがものにしたいと冀っていたものであつた。

先日、田能村竹田の年譜を繙読していたとき、竹田が天保六年八月

二十九日、齢五十九歳をもって病没したことに、改めて気がついた。かつては五十九歳という年齢などに、気をとめたことはほとんどなかった。だが愕然としたことは、私自身が今年数え年五十九歳にあるという冷厳な事実であつた。暦の上の数え方はもちろん異なるが、かのドイツの文豪ゲーテは、一七四九年八月二十九日の金曜日、フランクフルトに誕生している。私の恩師、守屋謙二博士はゲーテを無二の師と尊敬されていたが、ご自分がゲーテと誕生日をとにすることを、最大の誇りとつねづね語られていた。ゲーテは周知のように『ファウスト』第一部を一八〇八年に世に送っている。彼は一七四九年の生誕なのであるから、奇しくも『ファウスト』第一部は、ゲーテ五十九歳の完成となるのである。

この私自身にとって何より大切に考えたい先覚大知識人たちの生没年月日の一致は、田能村竹田の最晩年、天保六年（一八三五）、五十九歳の年譜項目に注目することとなった。嗚呼、この竹田最後の人生の年の三月、彼は『山中人饒舌』の新刻校本を藩公に献呈しているのである。五十九歳。八月二十九日。このキーワード的な数的因縁は、

難解な『山中人饒舌』の書に立ち向う勇気を私にあたえはした。だが博識稀有の学殖の人、田能村竹田の遺著にまともに接近することなど、私には全く不可能である。原文は当然漢文である。やむなく岩波版『近世随想集』（日本古典文学大系）所載の故麻生磯次氏校注になる訓み下し文を引用文として用い、私見、謬見の二、三を書き添えてみることにしよう。

「予は山中の人なり。騷に云ふ、山中の人杜若をかをらしめ、石泉を飲みて、松柏に蔭すと。此れ其の分の宜しき所を言へるなり。然れば則ち詩を賦し、文を屬するは、稍其の位を出づ。矧んや書若くは畫を論ずるをや。」

『山中人饒舌』の竹田による序文は、右のような言葉で書きはじめられている。山中の人とは、はたしてどのような人なのであろうか。人間とのつき合いを嫌い、人間社会の共存共栄生活に満ち足りぬ気持をもつ人は、誰しも孤独感をいだく。孤独の気持をいやすために、人は大自然の中にその隠棲の場を探し求めることであろう。中国の故事に範を求むれば、寒山拾得や竹林七賢の名が思い浮かぶ。老荘虚無の学も見捨てがたい。

さて引用文中の「騷」とは、中国、戦国時代の楚の詩人、屈原の自伝的叙事詩「離騷」のことを竹田は言っているようであるが、実さい

の出典としては、「楚辭」中に見られる屈原の作「九歌」の中の第九、山鬼の篇中にこの原文はある。山鬼とは山中の怪神であり、どうやら女性であるらしい。（青木正児氏の説による）思いこがれた男に背かれた女性の失恋の情のごときものが、山中にて昇華され、純粹な気持を守りつづけ、いわば貞操を守りつづけ、ために石清水を飲み、松柏の樹の蔭でひっそりと暮すのである。

楚の国のためにつくしたはずの屈原は、その努力がむくわれず、ざん言により失脚、湘江のほとりを放浪し、はては汨羅（べきら）の河水に石をいだいて投身する、という悲劇の人であった。その屈原が吐露した心情から、竹田はまずその想いを述べようとするのである。本当の山中の人となるためなら、「詩を賦し、文を屬し、（中略）矧んや書若くは畫を論ずる」といった俗事にかかわることなどは、まさに「其の位を出づ」ることとなろう。竹田はそのために饒舌の語を表題に書き添えたのであろう。

饒舌とは多弁であり、おしゃべりのことである。私は現今の日本の社会は、饒舌すぎる人々の非常に多く集まった社会であると思っている。だれか顔見知りの人と出くわすと、その対話はとめどなくつづきにつづく。あたりに他人がおらず、二人だけの会話なら、一日中、しゃべりまくってもよいであろう。饒舌を嫌う相手であれば、次回出会うときにこのことを思い、ひそかに出合いを避けることだろう。問題はそれを大衆社会の中で、傍若無人に振舞いつづける点にある。

世にいう二十四時間ぶっつづけのテレビ放送とか、ニュース・キャ

スターたちのとめどのない解説といい、またラジオ番組のあの痴呆の群としか言いようのないトーク・トークの実態、週刊誌はいうに及ばず、かつては良識のシンボルであった大新聞においても、この饒舌のありさまが見受けられる実情を、諸兄はどうお思いになるであろうか。

うるさいテレビなら、とめればよい。さわがしいラジオ番組なら、スイッチを切ればよい。週刊誌も読まなければよいのだし、新聞も拾い読みをすればよい。——だがただそれだけで済むのなら、解決はいとも簡単であると申せよう。

饒舌には二種類あると私は思う。どうしても言わねばならぬと確信をもち、語を選び、想を練り、徹底的にものを言うこと、それが第一の饒舌である。饒舌の第二は、無言、沈黙の時間空間を怖れ、ただ内容の空無な言葉の洪水によって、この貴重な地球的時間の経過を汚しつづけるところの饒舌である。

現代人は少し多弁すぎるのではないか。私の饒舌の語に得る素直な反応である。

「饒」という文字は、もともと「豊かさ」を意味している。豊かさが量的なものと、質的なものに、はっきりと区別して認識されるとき、はじめて田能村竹田の「饒舌」の文字は意味をもつ。竹田の「饒舌」という迄もなく、質的な、いわば現代語でいえば高品質、ハイ・クオリティのそれなのである。

竹田は言う。

「百川・淇園・大雅・蕪邨(村)諸老の畫、今人又写す能はず。其の故何ぞや。蓋し市氣然らしむるのみ。」

彭城^{さかき}百川、柳沢淇園、池大雅、与謝蕪村、いずれも、もともと高品質の文人画家たちである。かれらの画作を、竹田在世のころの人々は、もはや描き得ぬと竹田は断定する。それはなぜか。つまり市氣があるからなのだという。三省堂版の『大辞林』は市氣を説明して「人々の歡心を得ようとおもねる氣持ち」と記し、参考文例として、夏目漱石の「文芸の哲學的基礎」中の熟語使用の文章をあげている。

漱石は「市氣、匠氣」なるものが、他人におもねる嫌らしい人間の俗氣にあることについて論じているのだが、いまは漱石に私は深入りはない。

「百年前の書法畫理、今日の考究精博、力を悉くして遺す無きがごときこと能はざる也。而も今人却って及ぶ能はず。愈々詳かにして愈々降り、益々工みにして益々俗なり。他無し。古の学者は己れの為めにし、今の学者は人の為めにす。」

右の竹田の評文は非常に興味深い。これは科学と芸術の問題を考えさせる一文なのである。科学は技術の高度化を伴ってかぎりなく進歩展開してゆく。だが科学の驚異的な進歩は、そんなに人間の生活に多くの幸せをもたらして来ているだろうか。人間生活の利便さ、物質生

活の豊かさ、いずれも人々は幸福そうに見える。だが一度、自分の心の中をのぞいてみるがよい。あなたの心の中は、本当に豊かに健全に、人間であることの満足すべき喜びに充滿しているだろうか。私は否定する。現代の人間は決して幸せではない。竹田の言葉を借りるなら、自分自身のために考えるのでなくて、他人のために、つまり他人より利を得るための方法として、画家の場合なら、画を教え、画作品を売っているのである。当今の流行とはなにか、今の若者はどのようなものに興味を示すか、などの愚劣な思考方法が優先しているのである。現代人は、おそらく自分とはいったい何者なのだろうか、と考えたりしないのではなからうか。

自分自身のために、あるいは自分自身が心から承服出来るような内容の生活を、諸兄は日々送っておられるだろうか。

企業体自身（大学のような組織を含め）の中での会議の無意味な多さ、委員会設置数の増大化、いずれも、「人のため、他人のため」の形式的な事務機構運営にすぎない。

人間はもう少し賢くなるべきではなからうか。

（本学助教授・美学・倫理学）